人生は、負けないで最後まで生き抜くこと

エプロン通信員　城間　ちえみ

新年明けましておめでとうございます。

私は毎年、年頭に今年の抱負を決意します。なかなか、決意通りにはいきませんが、目標を持つことによりそれに近づく努力をするからです。誰にとっても1年は365日、朝が来て、夜になる、そして又朝が来る。そんな自然の営みを感じ、本来人間も自然の一部ということを感じられるのが元旦です。

私は、高校時代におじから教えてもらった教訓歌があります。それを紹介したいと思います。

「金剛石もみがかずば、珠の光はそわざらん、人も学びて後にこそ、まことの徳は現るれ、時計の針のたえまなく、めぐるがごとく、時の間の光陰おしみて、励みなば如何なる業かならざらん・・・・・・」

努力する事の大切さ、達成したときの喜びを私に伝えてくれたことに感謝しています。惰性に流されそうになるとき、その言葉を思い起こし発心して自分自身を奮い立たせています。

幼い頃、家族と離れて暮らしていたせいでしょうか、いつの頃からか客観的に自分を見る癖がついてしまい、障害を持っていることで「どうせ、わたしなんか…」というマイナス思考に物事を捉えがちでした。しかし、結婚して家族を持ち2児の母になったことで、自分が変わらなければ子供の教育は出来ないと少しずつ前向きに自分の考え方を改めました。夫や子供たちがいたから前向きになれたのだと感謝しています。「自分自身の人生なんだ！幸せになろう」「自分にしか出来ない使命がある」「生きることは戦うこと」「人生は、負けないで最後まで生き抜くことなんだ」と、主体的に前向きに生きようと思えるように変わりました。とはいっても悩みは尽きませんが、悩みに負けない自分、必ず乗り越えて人生を楽しめる自分になりました。

「千里の道も1歩から」、その1歩を大切にし、毎日が元旦。そういう風に新しい1日を送ることにより新しい自分を発見して開いていけると思います。自分で会得した確かな幸福感・充実感は何者にも変えられない心の財産となります。その善（前向きな生き方）の連帯こそ平和への第1歩だと思います。

どうか、今年1年宜野湾市民が、安心して幸福で平和に暮らせるよう心よりお祈りいたします。

茶ぐわーゆんたく 69

学校だった神宮寺

あけましておめでとうございます。

年末は、普天満山神宮寺で除夜の鐘を聞いた方もたくさんいらっしゃるかと思います。宜野湾の人々から親しまれている神宮寺ですが、一時期、学校として使われていたことはあまり知られていません。

今から100年以上前の1882（明治15）年4月、神宮寺の境内を借りて「中頭小学校」という学校が開校しました。

この頃沖縄は、琉球王国から沖縄県に変わったばかりで、日本の制度や習慣がまだ浸透していませんでした。そのため小中学校もなく、当時中頭の中心地だった宜野湾村に、新しく置かれることになりました。しかし生徒は、中頭全域から募集したにも関わらず、たったの21人でした。というのもこの時代、学校へ行く事は珍しく、特に一般的な家庭の子どもは、学校へ行かせるより働かせる方が多かったのです。そのため中頭小学校でも、生徒のほとんどは裕福な家庭の子どもでした。

さて、開校した中頭小学校ですが問題もありました。先生は県外の人だったので、まず言葉が通じません。当時の子ども達は、方言しか話せませんでした。また教科書や文具もそろっていませんでした。しかしその後、沖縄県令（今の県知事）が中頭小学校を訪問すると、子ども達は「沖縄対話」（共通語を勉強するための教科書）を間違いなく読み、他の難しい本も読みこなしていました。これには県令も驚き、高く評価したといいます。

まず共通語を覚えることから。それが沖縄の近代教育の初日の出でした。そして宜野湾の教育もまた、神宮寺の境内から始まったのでした。

▲普天満山神宮寺
1930（昭和5）年頃

『宜野湾市史』への問い合わせ
教育委員会 文化課
☎893－4430